「舞台演出」考
The Study of the Stage Direction

1K06B067　　片島　亜希子
指導教員　主査　杉山千鶴先生　　副査　寒川恒夫先生

【1．はじめに】

筆者にとって、舞台とは幼い頃から現在も近でかけがえのない存在である。高校生まではバレエを習っていたため、演者（ダンサー）として舞台上に立ち、大学で所属した学生劇団では、主に演出というポジションで活動してきた。演者のときも演出のときも舞台に関わる機会があるたびに、舞台というものの理想の姿・あるべき姿を自分のなかで構築しては、それを舞台上に実現することを繰り返してきた。そのずっと考え続けてきた舞台の理想の姿・あるべき姿をここで整理し、文章として客観的に見つめ直すことによって、筆者が今まで考えてきた演出論を集大成としてまとめたいと考えた。本研究は、ひとつの演出論の確立を試みることを目的とする。これは事例を筆者とするものである。

【2．舞台演出家という仕事】

演出家の仕事とは、やりたいことを役者やスタッフにもらうことではなく台本が作品を通して伝えいことを舞台と俳優を使って具現化し、表現することである。つまり台本は絶対である。しかし、台本は必要最低限の骨組みしか提示しない。その肉付けは演出家と俳優に任されている。そのために役者と演出家は台本が絶対でありながらも作品に参加し、同じ作品を色々な演出を試みることができる。

【3．舞台演出にまつわる諸問題】

人間は文化をもつ動物である。文化があるからこそ楽しめることもある一方、文化があるせいで経験できないこともある。文化的なものは文化の中でしかたのしめないかわりに、文化の支配構造の中では、文化的でないものは排除される。私たちが文化を営むというのは何かを無から生み出す「創造」ではなく今あるものを違う角度からとらえようとする「想像」である。人間の「想像」は、絶対的に新しいものは生み出さないが、自分の経験、知識をもとにそれらを様々な組み合わせをすることで、際限なく「想像」することができる力を持っている。

【4．演出家の舞台哲学】

私たちが、美しいものは何か、どのようなものであるか、と考えるとき、私たちはもうすでに目に見える美しいものの背後にある原因や原理の存在を前提としている。舞台の演出は千差万別といえる個人の感性を前提とした上で万人に面白いと思われるような作品に仕上げることが求められる。このようなことができるのは舞台が過去に起きたことではなくこれから起こりうることを提示する場であるからである。起こりうることを体験することで観客は舞台上にそこに人間の真理をみる。この経験が観客の心を大きく動かすのである。

人間には、ある真理を目指して生きていく先天的な力と、その人の生き方によって得られる感性を軸とした真善美を構築していく後天的な力がある。この大きな２つの力こそが、すべての人間の活動する根源に相当するものである。これらの力に、いかに忠実に舞台上の演出を、どこまでつけていくことができるかが演出家の

勝負どころとなる。これを踏まえて筆者の思う理想の舞台は、全ての登場人物の真善美がしっかりと確立していて、それら全てが結局はひとつの真理に帰結するという構図がぶれない舞台である。

【5．終わりに】

　舞台における理想の姿、あるべき姿というのは、筆者にとって一生かけて考え続け、発展させ続ける命題だと考えている。しかし考え続けていくためには、ことあるごとに立ち止まって「その時の自分」の感性を見つめ、今できる自分の可能性と自分の限界を繰り返し確認していくことが絶対に必要である。今までの自分、今の自分、これからの自分をみつめ、これからも舞台のあるべき姿を模索し続けなければならない。以上を筆者の演出論として提示したい。